

史跡・古墳



神前地区で出土した土器



永井遺跡(尾平町)
弥生土器 細頸壺
弥生時代中期



大日山(古墳)出土(寺方町)
須恵器提瓶
古墳時代後期



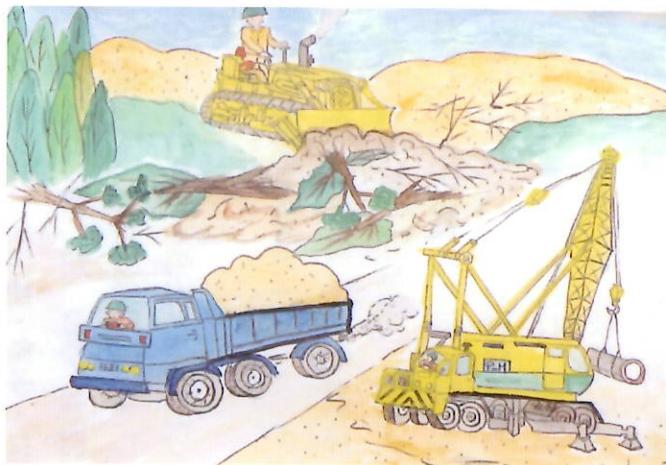
永井遺跡(尾平町)
弥生土器 鉢
弥生時代前期



永井遺跡(尾平町)
弥生土器 甕

神前地区には、21の遺跡があります。中でも尾平町の永井遺跡は弥生時代の遺跡で、2,300年ほど前の住居跡やお墓が見つかっています。古くから人々の住みやすい地域であることがうかがわれます。

たに
だ
やま
谷田山



神前地区の新興住宅地として、昭和四十九年から五十年にかけて造成された美里ヶ丘は、現在では見渡す限り家が立ち並び、閑静なたたずまいを見せています。

この地が住宅地として造成されるまでは、「谷田山」と呼ばれ、尾平町の里山でありました。人々はこの山で柴を刈り、薪をつくって生活に役立てていました。また四季を通して山からの自然の恵みも多く、わらび・ぜんまい・うど・松茸などが多く自生して、それらのものは食用として各家庭に季節の香りを運び、食卓をにぎわせていたものでした。

山には食材以外にも四季折々の山野草が自生し、山

つつじ・笹ゆり・桔梗・撫子・女郎花などの花々が咲き乱れ、私達の生活と自然とが一体となつてありました。こうした自然との共生の中で、人々の心の豊かさ・優しさや人情なども育つていったのではないでしょうか。また谷田山には永い時空を過ぎた現在も言い伝えられている二つの出来事があります。

明治四十五年五月一日、大正天皇が皇太子であつた頃、陸軍参謀演習視察の折、「谷田山」に寄られました。山に自生する赤楊樹をご覧になつて、「あれは何という木ですか。」と尋ねられ、地元の村人が「赤楊樹と申します。」といつた会話がなされたことが、今も古老達の間に残っています。それにちなみ後日、神前村より宮内庁へ赤楊樹の苗を十株贈つたところ、その返礼として、大正元年十一月二十一日、宮内庁より金百円をいただきました。村民一同深く感じ入り、村の特別会計に計上し



て、この百円を元金に五年間で積立金五百円にまで増やし、公益事業に利用したことが、三重郡誌に明記されています。

さらに谷田山では第二次世界大戦時、横須賀海軍の軍事基地に指定されて一台の高射砲が設置され、終戦までの日を軍が使用していました。またこの二つの出来事以外にも、毎年五月二十七日の海軍記念日には、小学校の生徒が大日山と谷田山に登り、海軍の武運を祈つたということです。

こうした歴史を持つ谷田山も時の流れの中で大きく変貌し、往時を偲ぶものは今では何も残っていません。しかし新しい町「美里ヶ丘」として生まれ変わった谷田山は、人々がこの地で末永く平和で、住みよい町として発展していくことを見守り続けていくことでしょう。



柳橋

平成十五年道路網整備によつて閉鎖となつた尾平町に架かる柳橋は、その歴史も古く文政八年（一八二五）五月に開設、天王川原と高柳との間に架けられた長さ三六間（約六五・五メートル）、幅七尺（約二・一メートル）の木橋で、神前地区に架けられた最古の橋であつたといわれています。

柳橋は文政八年から閉鎖となる平成十五年までの永きにわたり、特に尾平地区住民とは深い関わりをもち、住民たちの生活を守り続けてきた橋と言つても過言でないようと思われます。なぜならば、戦前までは尾平町の大半が農家であつて、川の向こう（三滝川の右岸）に農地を持つ家が多く、柳橋なくしては農作業に従事することができないのが実情だつたからです。

こうして私たちの生活に大きな恩恵を与えてきた橋も閉鎖までの永い日々の中で、大水などの災害のため、幾度も流され架け替えが行われてその姿を変えてきました。それらの橋の中に、今もなお心に残る鉄製の橋があります。その橋は当時にしては珍しく

欄干にはしゃれた細工が施されていて、渡るときに手摺を叩くとカラーンカラーンと金属音をたてていたことを思い出します。この鉄製の橋はおそらく尾平町の住民たちの白慢の橋であつたのではないでしょうか。しかし、この橋も昭和十九年、第二次世界大戦により、鉄製であつたために国への供出を余儀なくされてしましました。

その後、木製となつた橋も昭和三七年の大水で流出し、コンクリートの橋に架け替えられましたが、平成十五年には道路網整備のために西側に新しい橋が架けられ名称も尾平橋となり、尾平町の住民の生活を永きにわたり支え続けてくれた柳橋も、ついにその歴史に幕を下ろすことになつたのでした。

しかし、尾平町の住民の中には私たちの生活と共にあつた柳橋の姿は長く生き続けることだと思います。



そ 反り橋 ばし

神前小学校から東の方へ、石垣づくりの水路沿いに、三百メートルぐらい歩いてみてください。今から約二百年以上も前の天明六年（一七八六）に架けられた小さな太鼓橋を左側に見つけることができます。

この橋は総石造りで、長さが七尺（約一・一メートル）、幅が五尺（約一・五メートル）あり、欄干には左右三個ずつ合計六個の擬宝珠がついていました。

橋の北側の山腹にある保曾井神社の参道として造られ、橋の影を映す村下川の流れとともにこんな歌が伝えられています。

「曾井の反り橋、鎮台（兵隊）さんざとある、一人はまつて、かげんぼがうつる」
子どもたちの元気のよい歌声が、聞こえてきそうです。

文献によると太鼓橋の形は、足元に注意しながら渡ることで、参詣者の気持ちを落ち着かせるため、渡りにくいものになっているそうです。

第二次世界大戦の時代、召集を受けた若者が入隊する日には、村人たちが神社に集い、

壮行会そうこうかいがあこなわれました。村の若者たちは、長い参道を通ることで心を清め、親戚や村人たちの万歳ばんざいの声に送られながら、この橋を渡り出征しうばいしていくたそです。

橋を渡る若者たちの川面かわもに映った姿が、歌になり、また見送る人たちの想いによつては川面の影は、兵隊さんの姿とはまるで違つたものに見えたそうです。

子どもたちを戦場へ送り出す母親たちには、川面に映る自分の子どもの姿は一体どんな風に映つたのでしょうか。

そんな、いろいろな時代の母親たち



の想いも一緒に見つめてきた反り橋を、今も地域の人々は、村人の安全と安心、繁栄を約束する橋として何度も修理を行いながら守り続けています。

みなさんも近くへ行かれた時は、一度この反り橋の上から、この歌を思い出して口ずさみながら、川面に映る自分の姿を見つめてください。一体何が見えるでしよう。

「曾井の反り橋、鎮台さんがある、……」

林正寺のおかご

今から約四百年以上前の天下分け目の戦い、

「関ヶ原の戦い」の時代のことです。

諸国を流浪していった道西が慶長五年（一六〇〇）に道場として開き、そのち宝永五年（一七〇八）に「喬陸山林正寺」となった古いお寺が高角町にあります。

現在の林正寺の鐘楼（鐘つき堂）を左に見ながら本堂の入り口をくぐり、外陣でふと左上を仰ぎ見ると、古いかごが吊り下げられています。

かごは、小ぶりのもので、すだれの隙間から中をのぞくと、布張りで肘掛けもあり、女性用のものだそうです。



この「おかざ」が「おかざ」と呼ばれ、林正寺の歴史とともに、「一つのお話が伝えられています。

現在の本堂建立当時の住職大成さん（十一代目）が、文久元年（一八六一）に亡くな
り、跡継ぎの長男諦聴さんのもとへ、まつよさんが若坊守（住職の妻）として、高角村三
軒屋の加藤清左衛門家から輿入れ（嫁入り）された時に使ったものだそうです。

その時の情景を想像してみると、高角町の東端の三軒屋から林正寺までは約二キロメー
トルの道のりで、歩いての「おかざ」の行列はきらびやかで、沿道の人々もそれぞれお祝
いの言葉をかけたことでしょう。

しかし、そのような喜びも束の間のことでした。まだ幼い長男諦岸さんを元治元年
(一八六四)二月十一日に、同じ年の九月十六日に夫である諦聴さんをも亡くされたので
す。

まつよさんは大変手先の器用な方で、近在の人々へ裁縫・手芸をはじめさまざまなことを
伝えたりという記録も残っています。

近所の女性たちと一緒に笑顔で語り合いまつよさんの声が、今にも聞こえてしまうのです。
そんなまつよさんの喜びも悲しみも見つめてきた「おかざ」は、今もひつねんと世の中
を見つめ続けているようでした。

寺方村出屋敷の起^こり

今から約一百年以上も昔のことです。江戸時代の四大飢饉（農作物が採れないこと）の一つとされ、日本全国で沢山の人々が亡くなつた「天明の大飢饉」が、この地方にも襲いました。

寺方村にも天明五年（一七八五）から文政六年（一八一三）の三十九年の間に十七回といふ旱魃（日照り）が襲いかかりました。

百姓の困窮は計り知れず、村の「百姓持林」を売却したり、借金をしたりしてしのいでいましたがもう限度一杯になりました。村人たちは相談をし、四十一戸のうちの一部を移住させることを計画しました。村から二十丁（約二キロメートル）余り北の奥にあり、農作業をするには村から遠く、水守りにも苦労している農地で、田畠面積四十二町（約四十二ヘクタール）の土地へ当時の津藩領の百姓から七戸、久居藩領から三戸の家族五十六人が移住をしました。この人たちの住んだところが今の「出屋敷」と呼ばれる名前の始まりです。

江戸時代には、現代のように農業用水の整備も無く、地下水の汲み上げも簡単にはできませんでした。日照りが長く続くと村人たちが近くの氏神の社に何日間も集まり、時には十日間以上も立てこもり「雨よ降れよ、さ降れよ、ささ降れよ、さー降れよ」と歌って太鼓を叩き雨の降るのを願ったそうです。この地方の雨乞いの儀式には、多度大社の別宮「一目連神社」へ、村から代表を送り、お札をいただいて氏神へ供え、雨を乞うことも多かつたそうです。

その後、当地区では龍宮池、長谷池などを作り、灌漑用水はしだいに確保されました。

出屋敷の田畠も昭和の時代に入り、一反割（三十九アール）と耕地は三反割（三十九アール）と耕地整理が行われ、「雨よ降れ…」



の歌も聞こえなくなりましたが、当時の様子を伝える大正十一年に建てられた「開邑百年開拓碑」が今も出屋敷の公会所前にあります。

近くへ行かれた時は、この石碑の前で、自然の恵みのありがたさや先人たちの苦労へ思いを馳せてみてください。

もしかすると、耳元へ「雨よ降れ…」、空からは「ポツリ、ポツリ…」。

また、出屋敷公会所には公会所の竣工を記念して作られた藤棚があります。

十年ほど前、智積町から苗木をもらい移植されたもので、一年ずつ成長して、素晴らしい「藤棚」になりました。

四月も終わるころ、房の長さが五十センチほどになる藤の花が風にゆれていました。

藤の花には、たくさんの熊蜂がいそがしそうに蜜を吸いにやって来ていました。



ふるやとの「道標」

現在では、道路は整備され、道路標識、町内案内図なども設置されていて、道路の隅に放置されている道標には注意を払わないでしようが、それには次のような建てた人の思いや歴史があります。

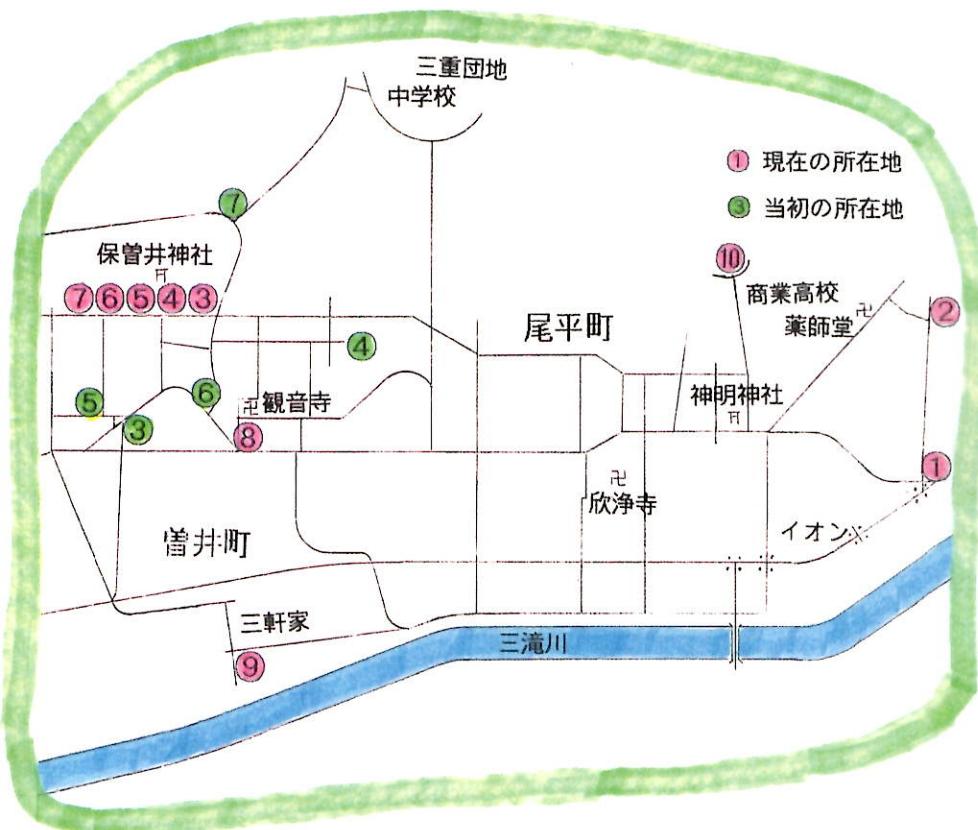
今から約百年前の大正八年、三重郡小杉村（今の四日市市小杉町）の服部泰次郎は病にかかるて余命が少ないことを悟り、かねてより宿願の道標を三重郡内に設置することを郡役所に申請し、約八ヶ月の間に私財で全てを完成しました。その設置数は三重郡二十九ヶ村、総数千百九一基に及んだと言われています。

泰次郎は、青年期には父の半農半商を手伝い、農閑期には小間物や雑貨を行商して商売のコツを習得、三十歳頃からは米の仲買人として大成功し、県下でも屈指の米穀商人になりました。大正七年の米騒動の時には、手持米二千俵を四日市市へ提供して混乱を防いだという美談を残しています。

六七歳で病没した泰次郎が若い頃に行商で道に迷つて苦労した経験から、各辻に道標の

建設の必要性を痛感し、後世のために残した道標。

神前地区にはそんな道標が、今でも泰次郎の名とともに十六基も現存しています。
まだ他にもあると思いますので、皆様も散歩がてら探してみてはいかがでしょうか。





③ 現在の所在地

① 当初の所在地

